



Title	単文のパズルと固有名についての新たな視点
Author(s)	小山, 虎
Citation	年報人間科学. 2001, 22, p. 161-174
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/6917">https://doi.org/10.18910/6917</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 単文のパズルと固有名についての新たな視点

小山 虎

### 〈要旨〉

J・ソールは、命題的態度とは無縁な単文においても信念文のパズルとパラレルなパズルが存在すると主張した。確かに彼女の主張するように、この問題は信念文のパズルと共通する部分が多い。したがって、従来の理論との関係が考慮されるべきであると思われる。

ソールと反論者との議論の詳細を見ていくと、信念文のパズルにおいて対立する二つのアプローチの対立がそのまま現れていることが分かる。しかし、そこで同時に、ソールが属する陣営（ネオ・ラッセリアン）が共指示的な固有名は同一人物について語っているはずだという直観を重要視しており、反論者の陣営（ネオ・フレイゲアン）が共指示的な固有名であっても何らかの条件が満たされなにかぎりは単純に交換可能にはならないはずだという直観を重要視していることも明らかになる。よって、両者の論点を共に踏まえた立場を模索してみよう。

そのような考えの元に、単文のパズルの新たな解決法としてメレオロジを用いた解決法が考えられる。この解決法は時間的部分の存在論と密

接に関わっており、一見新たな問題を持ち込むかのような印象も与えかねないが、むしろ単文のパズルにとつて貫時間的同一性の問題は避けて通ることができないと思われる。

### キーワード

単文、信念のパズル、ラッセリアンとフレイゲアン、  
メレオロジ、時間的部分

## 1 信念文のパズルと単文のパズル

1・1 単文のパズルとはどういうものか

J・ソールは、命題的態度文脈とは無縁な単文 (simple sentence) であっても、同一の対象を指示する固有名が交換可能でないケースが存在すると主張した<sup>1)</sup>。次の一組の文がその一例として挙げられている。

(1) クラーク・ケントが電話ボックスに入った。そしてスーパーマンが出てきた。

(1\*) クラーク・ケントが電話ボックスに入った。そしてクラーク・ケントが出てきた。

ソールによれば、(1) がある事実についてのまったく正しい記述だとしても (1\*) は偽であるように見える (p.102)。いわゆる信念文のパズルのひとつの提示法は、ある真な文に含まれる固有名をそれと共指示的な固有名で交換することによって得られる文が元の文と異なる真理値を持つ、あるいは真理条件が異なることを示すものであった。(1) と (1\*) において生じていることはまさにこのことだ、というわけである。

このパズルが信念文のパズルとまったく同じパズルであるのかは

さておき、少なくとも表面上はこの二つのパズルには共通する部分が多い。ひとつは上述したような共指示的な固有名の交換によって真理条件が変化すること (つまり (1) と (1\*) の真理条件が異なること) であるが、このことに加え、信念文において問題とされてきた別の問題、たとえば反射的性質に関する問題も単文に関して構成することが可能である。

この問題は従来、以下のように提示されてきた。共指示的な固有名は交換可能であるとすると、「ピエールはフォスフォラスはヘスペラスより重いと信じている」という文から「ヘスペラス」を「フォスフォラス」で置き換えることによつて、「ピエールはフォスフォラスはフォスフォラスより重いと信じている」という矛盾した信念をピエールに帰属する文が導出される。つまり、共指示的な固有名のあいだに反射的でない関係が成り立つのであれば、同一の対象に関して反射的でない関係が成り立つことになる。よつて一見もつとも信念 (たとえば「フォスフォラスはヘスペラスより重い」) を持っていると思われる人も、必然的に偽な信念 (「フォスフォラスはフォスフォラスより重い」) を持つことになる。しかし、この結論が妥当であるようにには思われないであろう。これが反射性のパズル (あるいはリチャード・ソームズ問題) である。

この問題は共指示的な固有名の交換可能性を端的に認めることの特つ問題点を強調するものと考えることができる<sup>2)</sup>。この問題の単文バージョンは以下のようになる。

(2) スーパーマンはクラーク・ケントよりも高く跳躍することができる。

(2\*) スーパーマンはスーパーマンよりも高く跳躍することができる。

(2) と (2\*) が同じことを表わしているのであれば、(2) を主張する機会はほとんどあり得ないと思われる。しかし、果たして (2) は (2\*) のような端的に矛盾した言明に過ぎないのだろうか。

(1) と (1\*)、さらに (2) と (2\*) は、単文のパズルにも信念文のパズルと同じアプローチで対処すべきであることを示しているように思われよう。つまり、この状況は以下のようなものだと考えられる。ある真な文について共指示的な固有名を交換することによって得られる文が少なくとも一見は偽であるように見える。したがって、何らかの道具立てを用いて偽であるという直観を説明することによって双方ともに真であるとみなすか、あるいは交換可能性を否定することによって二つの文が異なる文であるとみなす必要がある。

だが言うまでもなく、確かに両方の例のどちらについても命題的態度に関する動詞はおろか、心的状態にコミットするような語はまったく現れていない。よって、信念文のパズルに対して与えられたのと同じ説明を与えることは必ずしも成り立たないと予想される。ソールが主張するように、もし単文についても信念文の場合と同様

のパズルが生じるのであれば、それがこれまでに行われてきた議論に対してどのような影響を持つのが考慮されるべきであろう。

## 1.2 単文のパズルはなぜ問題となるのか

信念文のパズルに対するひとつの代表的なアプローチはN・サーモンのものである。サーモンと彼の支持者によれば、共指示的な固有名は確かに交換可能であり、交換の結果導出される文が一見元の文と大きく異なるように思われるのは見かけだけに過ぎない。この考えに従うと、単文のパズルでは(1)と(1\*)は同一の命題を表すということになるだろう。

サーモンはこの見かけの違いを命題的態度に基づくものとして説明する。だがこの方針は単文には当てはめられない(言うまでもなく「単文」は命題的態度と無関係だからである)。よって、サーモン流の立場をとるのであれば、一見単文のように見える文であっても実は命題的態度の一種であり、したがって真正の単文はほとんど存在しない、というあまり説得的だとは思われない主張をするか、あるいは、命題的態度の場合とは異なる単文用の語用論的説明を用意するかのいずれかの選択肢を取ることになると思われる。このどちらの選択肢を受け入れるにせよ、成功の見込みはある十分あると言えるかもしれないが、かなり大きな課題が存在することを認める必要がある。

他方、サーモンらに反対する立場、つまり共指示的な固有名の交換自体を否定するアプローチの行く先も決して容易な道のりとは思

われない。共指示的な固有名の交換可能性を否定するやり方はおおよそ二つに分けられる。ひとつは、(1)で交換可能と考えられていた複数の固有名は、見かけに反し、それら指示対象は同一でない(したがって共指示的でない)と主張することである。もうひとつのやり方は、これは信念文においては共指示的な固有名が交換可能でないと主張されるときによく見かけるものだが、指示対象は同一であつても対象の与えられ方(mode of presentation)が異なれば交換は一般には成り立たない(すなわち、与えられ方の違いが交換を妨げる)というものである。

前者の方法、すなわち指示対象の同一性を否定することのもつとらしいやり方のひとつは、指示対象は個体そのものではなく、その個体の持つ何らかの側面であるとする<sup>2)</sup>ことであろう。たとえば、レニングラードとサンクトペテルスブルグは同一の都市の時間的に異なる側面であり、その上の違いを解消するような道具立て無しには一般には交換可能ではない。レニングラードに住んでいたことがあつても、サンクトペテルスブルグに住んでいたことがない、と主張されたとしても何の不思議もないだろう。もちろん場合によつてはレニングラードとサンクトペテルスブルグを交換して構わない訳だが、それは両者が指す同一の都市を念頭に置き、その都市に関するかぎり交換は可能だ、ということに過ぎないと言ふことができる<sup>3)</sup>。したがつて、レニングラードとサンクトペテルスブルグが交換可能でないようにクラーク・ケントとスーパーマンも交換可能でないと考えられよう。

この方針の難点はソールが端的に指摘している。二つの固有名が共指示的でないのであれば同一性言明が成り立たなくなる。「レニングラードはサンクトペテルスブルグだ」という言明は偽であると主張することもできるかもしれないが、同様に(3)も偽でなければならぬ。

(3) スーパーマンはクラーク・ケントだ。

スーパーマンの状況設定を知るものにとつては、これは明らかに受け入れられない帰結である。

だが(3)は文字通り同一性を表わしていなければならないのだろうか。確かに(3)は同一性を表しているのではないと考えることも可能であろう。しかしながら、そうだとすると同一性言明には文字通りの同一性を表すものと、そうでないものがあることになる。では、何がこの違いを決定するのだろうか<sup>4)</sup>。

また、同一性言明以外の例を考えれば、見込みはさらに薄くなる。

(4) クラーク・ケントは空を飛ぶことができるのだが、彼はそのことを隠している。

「クラーク・ケント」と「スーパーマン」の指示対象が端的に別なのであれば、この文は偽でしかない。

これらの問いに答えることは不可能ではないのかもしれないが、

むしろ問題は、固有名の指示対象が様々に変化しようという点にあると思われる。これはつまり、固有名の指示対象が文脈によって変化しようと言っていることになるだろうから、結局のところ、固有名を指標詞と同様なものとみなすことと考えられる。しかし、その変動は指標詞のような規則性を持つとは考えにくい。固有名を使用する際にある種の恣意性が存在すること（つまり、「スーパーマン」と「クラーク・ケント」の違いに注目するならば、同じ「クラーク・ケント」でも厳密に同じ意味で用いられてはいないと考えることができること）を考えると、ごく一般的な文脈においても文脈に応じて固有名の指示対象が異なることを説明するのはかなり困難な課題であると言わざるを得ない。

以上の考察をまとめると、単文の場合でも信念文の場合と同様、共指示的な固有名の交換可能性を認めるかどうかで二つの立場に別れる。だが、交換可能性を受け入れるとしても信念文の場合とはまた別の語用論的説明が必要となる。一方、交換可能性を否定するとは文脈依存的な固有名を含んだ意味論の可能性を示す必要がある。どちらも不可能な課題ではないかもしれないが、大きな課題であることは疑いない。したがって、単文のパズルは信念文のパズルに隠れた大きな課題が存在することを示していると考えられ、よって単文を無視して信念文の意味論を考えるべきではない。<sup>8)</sup>

## 2 単文のパズルの解決法

### 2・1 ソールの意見とそれに対する反論

単文のパズルの発見者であるソール自身は、素朴な直観どおり、共指示的な固有名は交換可能であることを受け入れなければならぬと考える（したがって、新たな語用論的説明を模索することになる）。彼女がそう考える根拠のひとつは、(1\*)が偽であるように感じられることがキャンセルできることである。これは、(1\*)の真偽に関する我々の直観に語用論的な要因が大きく関与していることを予想させる。彼女があげる例は以下のようなものである（イタリックの部分に注目されたい）。

(5) クラーク・ケントが電話ボックスに入った。そしてクラーク・ケントが出てきた。だが誰もそのことが分からなかった。<sup>9)</sup>

この道具立ては基本的には信念文にも適用することができる（先に出してきた例を使えば、ピエールはそうとは知らずにフォスフォラスはそれ自身よりも重いという必然的に偽な命題を誤って信じているのである）。このこととサーモンらの説明とがどれほど整合的であるのかは決して明らかではないが、敵対者に比べ、見込みは高いと言ふことは強弁とは思われない。

しかし事態はそれほど楽観的なのだろうか。サーモンらに反対す

る論者の一人であるG・フォーブズは、ソールが指摘している現象は直観のキャンセルを意味しているのではないと言い、また、ソールがあげた要求をクリアする道具立てを提供することにより、交換可能性を否定するアプローチの優位性を主張する<sup>11)</sup>。フォーブズは以下の例を用いてソールの議論が不適切であると論じる。

(6) オイディプスは自分の母親と結婚したがっている。だが彼にはそのことが分からなかった。

(6) は (5) と類似した文であり、(5) が真であることが (1\*) が (その見かけにも関わらず) 真であることを保証すると言っているのであれば、同様に (6) が真であることが (5) の前半部分、すなわち「オイディプスは自分の母親と結婚したがっている」が真であることを保証すると言うべきであろう。だがそのような保証があると考えられない。と言うのも、(1\*) は厳密には真だと言えるかもしれないが、(6) の前半部分、すなわち「オイディプスは自分の母親と結婚したがっている」は厳密には真ではない(「自分の母親」は確定記述だから)。彼が結婚したいと思っているのはあくまでイオカステであり、オイディプスは彼女が自分の母親だとは知らないものである。(6) の「自分の母親」を固有名「イオカステ」と置き換えた場合と比較すればその違いは明らかになる。このことはソールが語用論的な効果しかもたないと考えた追加部分(「だが誰もそのことが分からなかった」)が実際は真理条件にも影響を及ぼす(したが

って意味論的な効果ももつ)ことを示していると考えるべきであろう。

フォーブズによれば、共指示的な固有名の交換が失敗するのは、問題の命題において表わされている内容には対象そのものだけでなく対象の与えられ方も含まれているからである。彼は(1)は(7)と同じ内容を表していると考えてよいと言う。

(7) クラーク・ケントが、そう装って (so-attired)、電話ボックスに入った。そしてスーパーマンが、そう装って、出てきた<sup>12)</sup>。

彼によれば、交換可能性が成り立つのは固有名以外の部分にまったく変化がない場合である。つまり、(7) から (1\*) を導出できないのは (1\*) には「そう装って」に相当する部分が保存されていないから、ということになる。

この見解の持つ重要な帰結のひとつは、このようにクラーク・ケントとスーパーマンを別々の側面として区別しつつ彼ら(彼?)について語ることはクラーク・ケントとスーパーマンが同一人物であることを知っているものにはできないことである。彼らが同一人物であることを知らないものにとつては、そのような区別はそもそも無用である。したがって、事情を知っているか否かによって(1)を発話することによって表わすことのできる内容に違いが生じる。事情を知るものは(7)の意味で(1)と言うことが可能であり、よって(1\*)とはまったく異なることを語ったことになるが、事

情を知らないものは端的に(1)とすることができのみであり、その発話は(1\*)を含蓄する。

## 2・2 クリントンは嘘をついていないのか？

この帰結が問題となるとは思われないかもしれない。フォーブズによれば<sup>13)</sup>、たとえばスパーマンがクラーク・ケントと同一人物であることを知らないロイスが(1)と言った場合、その発話は(1\*)を意味することになる訳だが、事実を知れば彼女はただちに自分の発言が(1\*)を意味していたことを認めるだろう。あるいは彼女は、本来は(7)のように言うのが適切だった、とさえ考えるかもしれない。

しかしこの帰結がはらむ問題はこのような考察によつては払拭されない。ソールは非常に興味深い例を挙げて反論する<sup>14)</sup>。クリントンアメリカ大統領に対してモニカ・ルインスキーとの関係が尋ねられ、クリントンは次の(8)を言うことによつて答えたでしょう。

(8) 私はルインスキーさんと性的関係を持ったことはない。

ここで、クリントンにとつては「ルインスキーさん」と「モニカ」が「スパーマン」と「クラーク・ケント」のように同一人物に対する別の名称であつたと想定することは許されよう(事実の如何には関わないことにする)。フォーブズ流の説明に従うと、この想定のもとではクリントンは(8)によつて偽証してないことが立証

可能となる。彼は、自分が性的関係を持ったことがあるのは「モニカ」の方であり、(8)に現れる「ルインスキーさん」は、(7)における「スパーマン」と「クラーク・ケント」が交換できないように「モニカ」と交換できないと主張できるからである。そして、聞き手(尋問者、及び視聴者)は「モニカ」と「ルインスキーさん」の同一性を知らないので、クリントンの発言の真意を知ることができない。

フォーブズ流の説明を受け入れることは、話し手がどのような知識を持っているのが確定されなにかぎりはその文の内容も確定できないことを認めることである。そしてそれは同時に、話し手に過剰な自由を与えることに繋がりがかねない。ソールが考えるには、これは事情を知らない聞き手に対しては嘘を言ったと責められることが無くなるという帰結を持つ<sup>15)</sup>。

もちろん、このような主張に対してフォーブズには答える術が無いわけではない。この例に関する限りはフォーブズに同調するムーアによれば<sup>16)</sup>、ソールの言っていることは彼らの主張に対する違和感の表明に過ぎない。そしてその違和感の対象は、両者が状況を完全に理解しているものとそうでないものを区別し、状況を完全に理解していれば共指示的な固有名を区別して話をするのが可能となるという主張にコミットしていることである。彼らによれば、(1)と(1\*)の真理条件が異なるのは話し手(さらには話し手の意図)に由来する。したがって、状況をよく知るものは知らないものに対して偽であることを言わずに間違つた情報を与えることが可能とな

る。だが逆によく知らないものの観点からこのことを述べれば、事情をよく知っているものが(2)のようなことを述べようとしても、よく知らないものにとっては彼は必然的に偽なことを述べるといふ無意味な行為を行っているに過ぎない。

このことについてムーアは、これは状況をよく知る者の観点から述べられたことを状況を知らないものの立場で完全に記述することの困難さに由来しているだけだといふ<sup>17)</sup>。しかし逆にソールは、このような困難が生じるのは、事情をよく知っているものにしかな述べられない種類の命題(フォーブズの場合は対象の与えられ方が含まれる命題、ムーアの場合はアスペクトについての命題)が存在しているからである。そのような種類の命題を持ち出さずともこのことが説明できるのであれば、アスペクトなどの特殊な装置は不要であると論じる。

## 2・3 新たな視点の必要性

結局のところ、両者は相容れない直観を維持しようとしているので、互いの議論が決定的でないことを示すことが主に行われている。あるいは泥沼化しているとさえ言えるかもしれない<sup>18)</sup>。これはある意味で当然のことかもしれない。現在、信念文のバズルに関する議論はネオ・ラッセリアンと呼ばれる立場とネオ・フレীগアンと呼ばれる立場の論争となっている<sup>19)</sup>。単文のバズルについてもこの両方の立場が可能である。さらに、ソールは直接指示論者(すなわちネオ・ラッセリアン)であることを公言しているし、対するフォー

ブズの方はネオ・フレীগアンの代表者と目されている。代理戦争が勃発するのも自然の成り行きであろう。しかしそうだとすると、単文のバズルは信念文に関してこれまで行われてきた議論に対して新たな問題を提供しているとはいえず、その解決に関しては何の寄与もしないのだろうか。

単文のバズルの解決法として望ましいのはラッセリアンかフレীগアンのどちらか、という従来の見方に捕らわれているかぎりはその通りであるかもしれない。そこで、単文のバズルを少し違ったふうに眺めてみることで新たな可能性を模索することにした。

## 3 バズルに対する新たな視点とメレオロジ

### 3・1 新たな視点による問題の整理

ここで次のような新たな例文を加えることは有益であると思われる。

(1\*\*) スーパーマンが電話ボックスに入った。そしてクラーク・ケントが出てきた。

(1)と(1\*\*)の関係についても(1)と(1\*)の場合と全く同じであると議論することが可能かもしれないが、明らかに(1)と(1\*\*)を同一視することは誤りである。(1\*\*)は(1)とは異なり、スーパーマンが正体を悟られぬようクラーク・ケントに

戻ったことを表わしている。つまり、この二つは全く逆の事実について語っているのである。だがもし(1)と(1\*)が同じ意味だと主張するのであれば、(1\*\*)についても同じことを主張せねばならない。これはソールに代表されるラッセルアンにとっては今ままで以上に困難な課題であろう。

ここで(1)と(1\*)と(1\*\*)を並べて眺めて欲しい。確かに(1)から残りの二つが導出できると考えることは無理なように思われる。フォーブズを初めとするフレーゲアンはこのことを踏まえて、スーパーマンとクラーク・ケントの違いを強調することによってこのどちらの文の導出もできないようにしているのだ、と言うこともできるだろう。だが、仮にフレーゲアンが考えるようにどちらの導出も認められないとしても、(1)から(1\*)が導出できない理由と(1)から(1\*\*)が導出できない理由とは同じなのだろうか。少なくとも(1)と(1\*)は厳密には同じ真理条件を持つということができのに対して、(1)と(1\*\*)も真理条件が同じであるということは到底できないであろう。しかし、この違いを説明する術はフレーゲアンには残されていない。彼らにとっては(1\*)も(1\*\*)もどちらも同じように導出できない文だからである。

言い換えると、ラッセルアンにとっては(1)、(1\*)、(1\*\*)はすべて同じものであるのに対し、フレーゲアンにとってはすべてが別物である。そう考えるならば、ここで可能な選択肢はこの二つに限られてはいないはずである。すなわち、(1)から(1\*)は導

出可能であるが、(1)から(1\*\*)は不可能であるとする立場である。これは(1\*)が厳密には(1)と同じ真理条件を持つといわれることに対応していると考えられよう。(1\*)はスーパーマンとクラーク・ケントの違いが失われた、その意味でニュートラルな文である。それに対し、(1)や(1\*\*)はもつと多くの内容を含んでいる。

ラッセルアン、あるいはフレーゲアンの主張に従いつつ、この結論を得ることも不可能ではないかもしれない。だがむしろ、両者の立場から離れ、この結論を望ましい結論として捉え、それに至る別の説明を考えるほうが有益であると思われる。

そしてその説明がまったく存在しないわけではない。メレオロジ<sup>1</sup>を用いることで、このような結果を得ることが可能である。

### 3・2 メレオロジ<sup>1</sup>を用いた新たな解決法

共指示的な固有名はメレオロジカルな部分を共有していると考えられる立場はこの問題の新たな解決案となりうる。そこでこの考えを素描することにする<sup>20</sup>。

クラーク・ケントとスーパーマンを例にとろう。ケント/スーパーマンである対象をXとすると、両者の指示対象はともにXの時間的な部分から構成されると考えることが可能である。そこで、Xが時区間に渡って存在しているとしよう。クラーク・ケントは、たとえば時区間に「 $\alpha$ 」に関する時間的部分 $\alpha$ と、「 $\beta$ 」の時間的部分 $\beta$ 、さらに「 $\gamma$ 」の時間的部分 $\gamma$ といった複数の時間的部分のメレオロジカルな融合

体と捉えることができる（もちろんスーパーマンの方も同様な融合体であろう）<sup>21)</sup>。

このように考えると、クラーク・ケントとスーパーマンの交換可能性は一般には成り立たない。ただし、これらの融合体が共通部分を持つことも可能である。もっとも簡単な例は、スーパーマンⅡXであるケースである。このとき、たとえば $\square$ はクラークケントの部分であり、かつスーパーマンの部分でもある。スーパーマンにある時点と相対化された性質が帰属される場合を考えてみると、そのときのスーパーマンの時間的部分がクラーク・ケントと共有している時間的部分であれば、クラーク・ケントにも同じ性質が帰属されることになると思われる。よって、時区間 $\square$ においてスーパーマンが空を飛んでいるならば、クラーク・ケントも空を飛んでいることになるだろう。（1）から（1\*）への移行はこのようにして正当化される。

言うまでもなく、クラーク・ケントとスーパーマンがすべての部分を共有しているわけではない。現在の想定においてはクラーク・ケントは常にスーパーマンであるが、その逆は成り立たない。よって（1\*）から（1\*\*）への移行が単純に正当化されない理由が説明可能であると思われる。もちろん、スーパーマンとクラーク・ケントがどの時間的部分を共有し、どの時間的部分を共有していないのかが明らかにされないかぎり、どのような移行であれば正当化されるのか、といった問いに明確な答えを与えることは困難であろう。しかし、我々のスーパーマンのストーリーリーに関する知識はクラーク

ク・ケントとスーパーマンがどのように重なりあっているのかをを明確に説明できるほどではない。したがって、この困難はスーパーマンに関する我々の知識の不足によるものであって、現在考慮中の解決法そのものが持つ難点ではない。

また、このような考え方に従えば（3）は端的に真とはならないので、これまでの説明にあうように解釈することが必要となる。たとえば（3）は（9）を意味すると考えればこの場合でも（3）は真であると言えるだろう。

（9）スーパーマンはクラーク・ケントと何らかの時間的部分を共有している

より正確には、（9）は（9\*）のように整式化できると考える必要がある<sup>22)</sup>。

（9\*） $\square$ （スーパーマンの時区間 $\square$ における時間的部分 $\square$ クラーク・ケントの時区間 $\square$ における時間的部分）

### 3・3 時間的部分の形而上学

以上の解決法がきちんと機能するためには、時間に関するメレオロジーが必要である。しかし空間的なメレオロジーに比べ、時間メレオロジーには直観的に理解しがたい部分が含まれることは否めない。人によっては、時間的部分の存在論は可能であるならば拒否す

べき選択であるとさえ思われるかもしれない。よって、前節の解決法によって如何に望ましい結論が得られるとしても、時間的部分を認める存在論を受け入れる必要があるのであれば、その解決法は魅力のないものに映るかもしれない。

そのような意見に対しては次のように答えることができる。まず、前節の解決法にとつて、時間的メレオロジーを文字通りに引き受け、それは不可欠だとは限らない。確かに時間的部分という道具立てを用いずして前節の解決法を提示することは困難であろう。しかし、そのことは時間的部分の存在論が前節の解決法によって前提されているということを意味するのではない。前節の解決法にとつて必要なのは四次元メレオロジーではなく、時間メレオロジーだけである。そして、四次元メレオロジーによる貫時間的同一性の説明はもつとも理解しやすいものだと私には思われるが、三次元メレオロジーによつて説明することも可能であることが指摘されている<sup>23</sup>。よつて、時間メレオロジーが時間に関しての他の道具立てによつて「還元」できる可能性は十分であると予想される。そしてその道具立てが時間的部分を必要としないのであれば、前節の解決法も時間的部分を前提していないことになるだろう。つまり、この解決法にとつて時間メレオロジーは発見法的 (heuristic) であるに過ぎないかもしれないのである。

また、たとえ時間的メレオロジーが不可欠であることが判明したとしても、それが三次元的なメレオロジーとアナロジカルに考えてよいのかは疑問の余地がある。時間に関する我々の日常的な理解の

中には、過程や出来事は時間的に分割することが可能であることが含まれていると言つてよいだろう。時間的部分が問題を含むと感じられるのは、人のような個体が時間的部分から構成されているというテーゼにまでコミットすることが要求されていると感じられるからであろう。だが前節の解決法にはそのような含意はない。それが言つているのは、任意の時区間に関してある個体が複数の固有名の指示対象でありうるということだけである。さらに言えば、前節の解決法にはメレオロジカルな存在論でさえ必要ないかもしれない。

しかしながら、以上のような議論は結局のところ、時間的部分の導入は事態を紛糾させるだけであり、無益であることを示していると考えられるかもしれない。だが、時間的部分に対するこのような拒否反応はそのまま受け取るべきではない。時間的部分に関する議論をここで振り返る余裕はないが、ひとつ言つておくべきであると思われれることは、(1)と(1\*)のようなパズルを考える際、変化という概念を無視することはできない、ということである。単文のパズルでは同一の個体が別の時間において別の性質を持ちうることをどのように捉えるのがまさに問われているのである<sup>24</sup>。だから少なくとも、貫時間的同一性をまったく考慮の外において単文のパズルを考察すべきではないと思われれるのである。

## 結語

本稿で私は、単文のパズルが従来行われて来た信念文のパズルに

関する議論に一石を投じるものであり、その解決には新たな視点が必要であることを示そうとした。また、解決法の候補としてメレオロジを用いた解決法を素描した。この解決法は補足的な論点を加えることによって信念文のパズルにも応用可能であるように思われる。しかしこの問題は本稿の課題を越えていると思われる。

注

- (1) Saul (1997), p.102
- (2) ただしこの問題の発明者であるリチャーズは、そのことによって交換可能性が否定されるのではなく、この問題は克服可能だと考えている。
- (3) 例は異なるが、フールは同じ問題を考察している。Saul (1997), p.104.
- (4) この点はソールが強調することである。ただし、彼女が挙げる例は必ずしも心的状態にコミットしていないとは言えないとも主張される。Saul (1997), p.102. また、Forbes (1997), p.111を参照されたい。
- (5) Salmon (1986)を参照。
- (6) Saul (1997)ではこの立場に属するいくつかのオプシオンが考察されているが、実際に真剣に検討されているのは、共指示的な固有名は同一の個体に属する別の何か（この指示対象としてどのようなものが可能であるかについて立場が別れる）を指示しているという立場である。
- (7) 同様の例はいくらでも存在する。秦の始皇帝は漢の皇帝でもなければ明の皇帝でもないし、ソクラテスはギリシヤに住んでいたからと言って東ローマ帝国に住んでいたのではない。
- (8) 付け加えておくと、特に英語などのコブラを持つ言語に限って言えば、この立場ではコブラの用法の数が今以上に増え、しかもそのことに説明を与える必要が残ってしまっ。
- (9) つまりこれがソールの結論である。Saul (1997), p.107を参照。
- (10) Saul (1997), p.107
- (11) Forbes (1997) 及び(1999)
- (12) Forbes (1997), p.111.
- (13) フォーブズ自身が言うように、この点を明確に述べたのはJ・ムーアである。Moore (1999)を参照されたい。
- (14) 以下の例はSaul (1999)に由来する。
- (15) Saul (1999), p.111
- (16) Moore (1999) は、固有名は個体のアスペクトを指示することが可能であると主張することで、フォーブズと同様の立場を主張している。ただし、固有名はアスペクトではなく個体を指示する場合もありうるので、その場合は一般に交換可能性が成り立つとする点で、ムーアの立場はフォーブズと微妙に異なっている。
- (17) Moore (2000), p.253
- (18) フォーブズがクリントンの例に関して意見を公開していないことは興味深い。もともとこれは時間的な理由からかもしれないが。
- (19) この二つの立場の説明と、信念文の意味論に関する両者の違いについてはRecanati (1993)が詳しい説明を与えている。
- (20) 実際にメレオロジを用いた意味論として、Nakayama (1999a)及び(1999b)を参照されたい。Nakayama (1999b)は特に四次元メレオロジに焦点を絞って書かれているが、その体系が様々な意味論の問題に効果的であることがNakayama (1999a)において示されていると思われる。このことは四次元メレオロジに共感するものにとって大きな助けとなるだろう（ただし、私はNakayama

(1999a)で提案された体系を用いて単文のパズルを解決すべきだと主張したいのではなからう。

- (21) この種の時間的部分の概念はLewis (1988)に基いてこのように、基本的にSimons (1987)で説明されたような時間を時間に関して示されたものを考えるだけで十分である。

- (22) (9\*)では共有部分がひとつでもあれば同一性説明が真であるとしようが、共有部分がひとつでもあれば偽であるという同一性説明の解釈として不足かもしれない。しかしこのことは調整によって回避可能である。また、このような解釈は決して恣意的ではない。実際、同一性説明ではなからうがコロネラを含む文「犬は動物だ」に対して「これと同じ方針の解釈を手元の日本語が可能である」(23) 四次元メレオロジーと三次元メレオロジーの関係をこのようにvan Inwagen (1990)を参照された。
- (24) この文は付け加えるならば「信念文のバズルにこのように日本語が用いられたら」と。Kripke (1979)のメンテンスキの例を頭に思い浮かべた。

#### 参考文献

- Forbes, G., (1997), "How Much Substitutivity?", *Analysis*, 57, 109-113.
- Forbes, G., (1999), "Enlightened Semantics for Simple Sentences," *Analysis*, 59, 86-91.
- van Inwagen, P., (1990), "Four-Dimensional Objects," *NOÛS*, 24, 245-255.
- Kripke, S., (1979), "A Puzzle about Belief," in Salmon & Soames (1988), 102-148.
- Lewis, D., (1988), "Rearrangement of Particles: Reply to Lowe," *Analysis*, 48, 65-72.
- Moore, J., (1999), "Saving Substitutivity in Simple Sentences," *Analysis*,

59, 91-105.

- Moore, J., (2000), "Did Clinton lie?," *Analysis*, 60, 250-254.
- Nakayama, Y., (1999a), "Mereological Ontology and Dynamic Semantics," *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, 9, 29-42.
- Nakayama, Y., (1999b), "Four-Dimensional Extensional Mereology with Sortal Predicates," in: U. Mexiner and P. Simons (eds.), *Metaphysics in the Post-Metaphysical-age: Papers of the 22nd International Wittgenstein Symposium*, The Austrian Ludwig Wittgenstein Society, 81 - 87.
- Recanati, F., (1993), *Direct Reference*, Basil Blackwell.
- Salmon, N., (1986), *Frege's Puzzle*, MIT Press.
- Salmon, N. and S. Soames (eds.), (1988), *Propositions and Attitudes*, Oxford U. Pr.
- Saul, J., (1997), "Substitution and Simple Sentences," *Analysis*, 57, 102-108.
- Saul, J., (1999), "Substitution and Simple Sentences and Sex Scandals," *Analysis*, 59, 106-112.
- Saul, J., (2000), "Did Clinton Say Something False?," *Analysis*, 60, 253-257.
- Simons, P.M., (1987), *Parts: A Study in Ontology*, Clarendon.

## A Puzzle about Simple Sentences and a New Perspective on Proper Names

KOYAMA Tora

Jennifer Saul presented a puzzle. It is similar to the puzzle about belief, but in simple sentences that are far from propositional attitudes. Certainly, as she said, this puzzle has common features with the puzzle about belief. Thus, its connection with theories argued before should be considered.

Seeing details of arguments by Saul and her opposites, it gets clear two approaches conflicting in the controversy about belief sentences emerges there as is. However, it gets also clear that neo-Russellians (which Saul belongs to) give weight to an intuition that co-referential proper names must talk about one and the same person, and that neo-Fregeans (which the opposites belong to) give weight to another one that substitution of co-referential names must failure unless some conditions meet. So, we should seek another perspective that has points that the two approaches have.

Under this consideration, the solution using mereology can be regarded as a new solution of the puzzle about simple sentences. Since this solution connects closely the ontology of temporal parts, it may be thought to bring new problems. But, I think, the problem of identity across time cannot be avoided in order to think about the puzzle about simple sentences.

### Key Words

simple sentence, the puzzle about belief, Russellian and Fregean, mereology, temporal part